

1. 研究の成果と課題をふまえた平成 29 年度の実践内容

(1) 大学院における研究の成果と課題

道徳科の評価の意義については、学習指導要領解説に「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」と示されている。筆者は、「道徳科の評価を行うことで、生徒理解が深まり、授業改善がなされる」と仮説を立て、複数の評価方法を実践した。道徳ノートへの生徒の記述を、ループリックを用いて複数教員で評価をした実践研究では、次のような効果があることが明らかになった。

①短時間での授業評価が可能になる②生徒の特性を理解し、成長を認める評価や話し合いが促される③授業や生活を振り返り、文章には現れていない生徒の意欲を認める契機となる④複数教員間での共通の評価の判断基準として有効である⑤道徳的価値の自覚の深まりの度合いを把握するために有効である⑥生徒の発達段階や家庭環境を踏まえた上で生徒を認める評価が促される。

道徳科の評価を行うことで、「生徒理解が深まり、授業改善がなされる」ことは明らかである。しかし、授業評価を行うためには、授業後に複数教員で評価を行う時間を確保する必要があることや、全教員が道徳科とその評価について理解するための事前の研修が必要であることが課題である。

(2) 平成 29 年度の実践内容

本年度は、道徳教育推進教師として、道徳科や道徳科の評価についての校内研修を企画した。時間確保が難しく、計画した研修を実施することができなかつたため、十分な研修を深めることができなかった。しかし、31 年度を目前にして、「道徳科」の授業時間の確保や評価への教員の関心は高まりつつある。同時に、本校では今年度、研究主題の見直しが行われ、常にこの研究主題を意識した取り組みをしようするなど、教科研究への熱も、高まっている。これらの関心の高まりを統合することで、道徳科への負担感を軽減されることを期待し、道徳科での全校研修を行った。また、「道徳の時間」の評価を複数教員で行うことで、授業力が磨かれ、生徒理解が深まることも期待される。エバリュエーター（評価者）としての教師を支えているのが「見える力」であり、振り返りの省察や見通しの省察にその力が生かされる（秋田・佐藤 2006）。「生徒のよさ」や「授業のよさや改善点」について効果的に協議がされる授業研究が行われるためには、「見える目」が養われていることが必要となる。そこで、複数教員で多角的・多面的な見方で「生徒や授業のよさ」が語られる研究授業を積み重ねながら「見える目」が磨かれるよう、「生徒の変容」に着目した研究授業の在り方を提案した。

2. 平成 29 年度の実践の成果と課題

(1) 研究テーマ設定にあたって

本校の研究主題は、「自他を認め主体的に行動できる生徒の育成」であり、人権アンケートの結果分析から、部会の研究テーマを「自分の思いを言い合える集団づくり」と設定した。5月に行った研究授業では、指導案に「本校の研究主題とのかかわり」の項目を追加し、研究主題

を意識した授業評価が行われるよう提案した。

(2) 評価資料の収集

①研究授業における授業評価（観察法）

これまでの公開授業における授業評価では、教科の指導法について議論されることが主であった。そのため、生徒の変容を把握したり、教科の特性を理解した上での授業評価をしたりすることが難しかった。5月に行った提案授業では、参観者が「授業中に見られた生徒のよさ」を付箋に書き出す方法で授業評価を行う研究協議の方法を提案した。また、指導案には「道徳的価値の自覚の深まりを把握するためのルーブリック」を記載し、道徳の時間のねらいが参観者に理解されやすいように工夫してみた。道徳科の評価においては、教師が生徒のよい点や成長の様子などを積極的に捉えることが大切である。1回目の研究授業では、参観者から「よさ」を見とる視点がわかりにくく、意見が出しにくかったという意見があった。「よさ」の見え方については、それぞれの経験値や教育観の違いがあるが、様々な角度からの異なる「よさ」が出しやすくなるような、協議の進め方や雰囲気づくりが今後の課題である。

②質問紙による評価

道徳意識調査（高知県教育委員会）、人権アンケートを実施し、部会で分析を行った。今年度は年度当初に人権アンケートの結果から課題を分析し、部会の研究テーマを設定した。道徳意識調査については、年度末に分析をし、来年度の重点項目の検討と全体計画作成に生かしたい。

③道徳ノートの記述による評価

道徳ノートへの生徒の記述に対して、赤ペンで「生徒のよさ」や「生徒の成長」を記述し、生徒自身が自分のよさや成長を実感できるように意識しながら、フィードバックとしての評価を行ってきた。このフィードバックは、今後、通知表への記述評価する際にも有効な材料となる。しかし、今年度は、授業後に複数教員で評価を行う機会を設定することができず、単独での評価しかできていないことが課題である。学習指導要領解説に「部会や学年会あるいは校内研修会等で、道徳科の指導記録を分析し検討して指導の改善に生かすとともに、日常的に授業を交流し合い、全教師の共通理解と共通実践のもとに評価を行うことが望ましい。」と示されているように、授業後の評価を複数教員で行えるよう、簡便で日常的に実施できる方法を研究し、体制を整えていく必要がある。

(3) 成果と課題

道徳性に係る成長の様子に関する評価においては、その把握が難しいことから、複数教員により評価を行ったり、他の評価方法と複合的に行ったりすることで、信頼性・妥当性を上げることが求められる。そのためには、道徳の授業やその評価が全教員の共通理解のもと行われるよう、組織的、継続的、共同的に取り組んでいくことが、今後の課題であると感じている。今年度提案した、「生徒のよさ」を全教員で見とる研究授業の方法を、他の部会と協力しながら改善し、研究授業や協議で養われた「見える目」が「道徳の時間の評価」に活用されるよう、組織的な研修をすすめたい。

引用・参考文献

秋田喜代美・佐藤学.(2006). 著: 「新しい時代の教職入門」. 有斐閣.

文部科学省.(2015) 「中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」